冬風よ、どこへ吹く

imaginary

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冬風よ、どこへ吹く

【Ｎコード】

Ｎ０８２３Ｚ

【作者名】

ｉｍａｇｉｎａｒｙ

【あらすじ】

高校三年生で卒業を控えた谷原美津子だが、めまぐるしく変化していく周りの環境に戸惑っていた。学校では就職試験や大学受験などに備えて勉強に本腰を入れ始めたし、友人である小西茜には野津良平という恋人ができて、親には「もう少し大人になれ」と急かされる。もうちょっと子供でいたいのに……。すべての純粋乙女に告ぐ、ほろ苦いけど甘酸っぱい青春ストーリー。

第一話　歩こう、歩こう（前書き）

今回は、あまり笑いのセンスは追求しないことにした。
まあ、文学作品として読んでいただけたなら幸いです。
感想も貰えたら幸いです。
あ、あと評価とか入れてくれたら幸いです。
そ、それと、お気に入り登録とかしてくれたら幸いです。
「なんだこいつ」みたいな目で見ないでいただければ、幸いです。

第一話　歩こう、歩こう

もう俺たち、付き合ってるだろ？

友人である小西茜へ、友人ではないだろう野津良平がそのような表明をした事態に対して、私は初め理解しようと思いませんでしたし、理解する必要もありませんでしたし、そもそも理解できませんでした。この発言は相手の意中を無視して勝手に恋人だと断定した言い草です。なんて傲慢なんでしょう。野津という男は天誅を受けて恥を知るべきだと私は思いました。

しかし、幸せそうな顔を並べた彼らは、高らかに笑ってから「それは確認みたいなものだよ」と言いました。

彼らが二年間も交友していたことは知りませんでしたので、確認と言われてみると何だか納得できてしまい、それが癪でしたが、茜が幸せならそれでも良いかな、と私は不満を呑み込んだのです。

でも、やっぱり癪なのです。

▼

私は井江川の土手を歩いていました。今日は茜から遊びに誘われたので、現在は彼女との待ち合わせ場所へ向かう道中です。遊びとは言っても特に嗜む事もなく、ただ一緒の空間で日中を過ごして、お喋りをするぐらいです。以前は乙女チックな話で盛り上がっていたものですが、野津君が仲間に加わってからというもの、容易にそのような言動に走ることはできません。男性というのは胸の内に獣を飼っている生き物ですから、少しでも隙を見せてはいけないので

す。毅然としておかなければ食べられてしまいます。

冬の陽光はどこか白っぽくて辺りが淡く映ります。まるで水彩画の世界を見ているようで、とてもさっぱりしています。土手の脇に等間隔で屹立している木々は冬の冷たい風を受けて身震いするように葉の落ちきった枝を揺らしていました。

ひんやりした空気に当てられていると、頬が張っているような気がして、ひりひりと痛いです。私は鼻の位置まで赤いマフラーをつまみ上げると、はあっと息を吐いて頬に蒸気をおくりました。足元の雑草は、冬の到来に表情を変えて茶色に映えています。

ふと、横を見ると川原には二人の男性が肩を並べて釣りをしていました。水面には魚の黒いシルエットがいくつか見取れ、それらは川面をすうっと滑っています。時折、急に右折したり左折したりと踊っているようで、成果が芳しくない男性らを嘲るようにも見えました。

土手をしばらく歩き続けると、コンクリートの道はしだいに土に埋もれてゆき、周囲の雑草も私の背丈ほどに大きくなります。すると、前方に錆びれた看板が現れます。近寄ってみると『この先、行き止まり』とばこばこに歪んだ文字が確認でき、私はさらに奥へと足を進めました。

ここらに来ると、ふくらはぎが痛みだします。足の筋肉の両端を握られてぐいっと伸ばされたような感覚があり、私は屈みこんで痛い部分を手で揉みほぐしたりしました。もう何年も同じ道を往来しているのに、この痛みには慣れません。

屈んだ拍子に首を捻って空を見上げると、枯れた雑草に切り取ら

れた青空が見えます。綿を薄く伸ばしたような雲が漂っていて、静止画のように動く気配がありません。

それをじっと眺めていると、私は我を忘れてぼんやりし始めました。あの貼ってつけたような動かない雲も、じっと見つめてやれば、いずれは移動する姿を目撃できるのではないかと思ったのです。何でそんな風に思うのかは自身でも明白としませんが、この止まったものが動き出すのを見たいと思う衝動は自覚できるほど頻繁に起こります。たとえば時計の時針が動くところを見てみようと時計台の前で銅像になったり、満月の晩に月が東から西へ滑っていくのを見ようと、井江川の土手に寝そべって銅像になったりしました。

この衝動に起因するものが何か定かではないし、いつから芽生えた性かも分かり得ません。ふと、気が付くと、また私は銅像になっているのです。

そういえば、幼稚園の頃に行った遠足先の水族館でも私だけ小さな水槽に両手とおでこをぴったりくっつけて動きませんでした。「ヒトデなんか、見てて楽しい？」と後ろから声を掛けられましたが、それでも熱心にヒトデの動く姿を眼に焼き付けてやろうと断固として離れませんでした。映画館のスクリーンみたいに大きな水槽のなかで遊泳する魚よりも、私はいっそう動かない物に執着したのです。

いつの間にか、青空に過去の映像を重ね合わせていた私はハッと我に帰るとお尻を針で刺されたかのようにピンと立ち上がりました。

そうして、茜のもとへ急ぎました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0823z/

冬風よ、どこへ吹く

2011年12月3日00時46分発行